

## 写真人とその本 6 / 吉川速男

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー  
学芸員 宮崎真二

吉川速男<sup>よしかわはやお</sup> (1890-1959) は、東京外国語学校 (現：東京外国語大学) 独逸語本科卒業後陸軍に入り、第一次世界大戦中は大阪のドイツ人捕虜収容所で文書監査や通訳に携わっていました。

写真好事家であった父親の影響で幼少のころから写真をはじめており、1921年に『写真物語』を自費出版して、自宅と同じ銀座にあった出版社の「アルス」に持ち込みました。突然の訪問にも関わらず、丁寧かつ好意的な応対に感銘を受けて本格的に写真関連の著述活動を開始し、1923年に同社から『写真術の新研究』を発行しています。

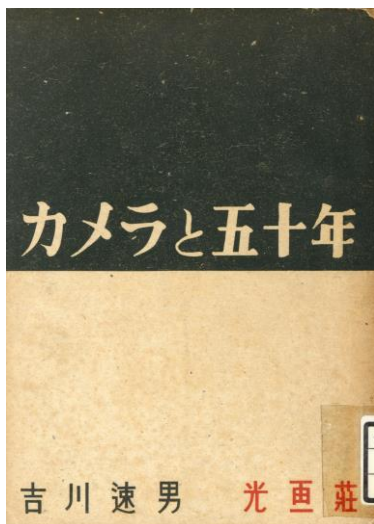


『カメラと機関車』

以降著作数は160点近くを数え、内容も多岐にわたっています。主なものとして『写真術の第一歩』(アルス・1928年)などの技法書、『私のライカ』(玄光社・1933年)などの機種別カメラ解説書、『8ミリ映画の撮り方』(大泉書店・1957年)などの小型映画技法書があります。

写真関連以外では鉄道趣味の方面でも知られており、鉄道書を数冊著しているほか、1938年に玄光社から写真集『カメラと機関車』を著しています。同書は吉川と共に鉄道撮影を楽しみながら、若くして亡くなった長男の作品も多数掲載されており、実質的には共著といえる内容です。

1947年には自伝と随筆をまとめた『カメラと五十年』(光画荘)を著しました。同書は『光画月刊』同年1月号から連載された「回顧五十年(私の昔話)」を基に構成されています。同連載には単行本未収録の内容もあり、両者を併読することで明治期のアマチュア写真関連をはじめとした様々な事項や、猛烈なインフレや用紙不足など執筆当時の混乱した写真、出版事情をも知ることができます。



『カメラと五十年』

このほか「私の寫眞の中心はステレオ」(『カメラと五十年』)と述べているように、吉川の父親が愛好していたステレオ写真に関しては特に熱意を持っており、『双眼写真の第一歩』(古今書院・1930年)のほか、写真雑誌各誌に関連記事を寄せています。この情熱は晩年に同居していた孫の島和也(元日本カメラ博物館運営委員)にそのまま引き継がれ、『現代カメラ新書 ステレオ写真入門』(朝日ソノラマ・1979年)として形になっています。また島は『鉄道写真2003』(ネコ・パブリッシング)掲載の「祖父、吉川速男の“カメラ”と“機関車”」にて、吉川について詳しく語っています。